

デフリンピック日本開催 出場狙う宮城勢

聴覚障害のあるアスリートの国際大会「デフリンピック」が11月、初めて日本で開催される。五輪やパラリンピックとは歩みを異にし、独自色豊かに発展してきた大会は、100

周年を迎える今年、東京を主会場に福島や静岡でも熱戦が繰り広げられる。宮城から出場を目指す選手に懸ける思いを聞いた。
(スポーツ部・北村早智里)

再び頂点へ

仙台大職員 佐々木琢磨



3冠・世界新で恩返し

金の立役者

2023年にブラジルで開催されたデフリンピック・カシアスドスル大会で、日本人として初めて陸上男子100m金メダルを獲得した佐々木琢磨(31)が仙台大職員で、再び世界の頂点に挑む。東京大会への出場が決まれば4大会連続でのエントリとなる。100mは、2000年、400mリレーでの3冠と100mの世界(ろう)新記録の達成を目指す」と高い目標を掲げる。

2月中旬、宮城県柴田町の仙台大グラウンドで、陸上部と一緒に練習する佐々木の姿があった。聴覚障害のある学生と一緒たウォーミングアップをした後、100mを何本か走り、フォームや感覚を確かめた。

この日は昨年の国民スポーツ大会成年男子100mで優勝した卒業生、大上直起(25)青森・ASUNAROにも練習に訪れており、最後は並んで100mを走った。佐々木は「調子はいい感じ。力のある選手と一緒に走れて良い刺激になった」と爽やかな表情を見せた。

佐々木が走る様子を観察し、時には動画を撮って、1本走り終えるごとに声をかける人物がいる。陸上部部長の名取英(36)。男子400mの元日本記録保持者で、七十七銀行陸上部の監督を約25年務めた。16年に現職に就き、18年から佐々木を指導する。22年大会での100mの金の立役者だ。

2人の師弟関係の始まりは18年3月。仙台大を卒業して大学職員になった2年目、佐々木はスランプの真っただ中だった。16年の自己ベストは10秒75だったのが、17年は1秒00止まり。17年7月のトルコで開催されたデフリンピック・サムスン大会では400mリレーで日本初の金メダルを獲得したが、個人種目の100mでは7位に終わっていた。大会後に試行錯誤をしてもタイムは一向に上がらない。どうしていいかわからなかった。燃え尽きたと思っていた。

そんな時、ふと名取さんの存在に思い至った。交流はほとんどなかったが、以前から名取さんが陸上部の学生を教える様子を見ていた。身ぶり手ぶりで何を言っているか理解でき、内容にも説得力を感じていた。

「この人に教えてもらえば金メダルが取れる」。直感的に思った。研究室を訪問して「指導してもらえませんか」と直談判した。「障害があるからと、特別なことはしない」という条件の下、指導が始まった。

名取さんは当初の佐々木について「地面に着く足音が高く、ばたばたと足だけで走っている感があった」と振り返る。体全体で足を力を与える「効率の良い走り方」を目指してフォームの改善に取り組んだ。

佐々木の聴覚障害は一番重い「重度」に分類される。障害の影響で平衡感覚は弱いが、名取さんは「トレーニングで改善されるため、走りそのものではない」と分析する。

特訓の成果が表れたのは1年後だった。19年6月、日本聴覚障害者陸上競技選手権(現在の日本デフ陸上競技選手権)の100mで優勝し、3年ぶりに自己ベストを更新。10秒70。9月には大学内の記録会で、100

mの日本ろう新記録となる10秒62を達成した。

環境広げる

佐々木は仙台大を、聴覚障害のあるアスリートにとって「当たり前」の環境を、広げる第一歩と位置づける。仲間がいて、手がける健康の部員もいて、寄り添ってくれる指導者もいる。佐々木が大学生の頃は部内に手話ができる人はおらず、今の状況になることは簡単じゃなかった。自分がつくった土台を後輩に渡したい」と変化を喜ぶ。

陸上



メ モ 100mなどのトラック種目では、アナウンスや号砲の代わりにスタートランプを使用する。選手の足元に置き、「オン・ユア・マーク(位置について)」で赤、「セット(用意)」は黄、号砲を意味する緑が、順に点灯して合図を送る。陸上競技機器メーカーのニシ・スポーツ(東京)が開発した製品の精度が高く、国際大会で使用されている。

デフリンピックに向けて部員と練習する佐々木(左)
11月26日、宮城県柴田町の仙台大グラウンド

2023年にブラジルで開催されたデフリンピック・カシアスドスル大会で、日本人として初めて陸上男子100m金メダルを獲得した佐々木琢磨(31)が仙台大職員で、再び世界の頂点に挑む。東京大会への出場が決まれば4大会連続でのエントリとなる。100mは、2000年、400mリレーでの3冠と100mの世界(ろう)新記録の達成を目指す」と高い目標を掲げる。



手話を取り取りする佐々木(右)と名取さん。二入三脚で再び世界を目指す。

五感研ぎ澄まし

東北福祉大2年 佐藤杏奈



父と二人三脚

デフボウリングの日本代表として活躍する東北福祉大新2年の佐藤杏奈(19)は生まれつき重度の聴覚障害があり、両耳の人工内耳を外すと世界は静寂に包まれる。健聴のボウリングから転向して4年、「自分の世界に入り込めて、今は人工内耳がない方がプレーに集中できる」と話す。

中学から本格的にボウリングを始め、仙台城南高2年でデフ競技に切り替えた。投球の良しあしを判断する大きな要素の一つが、ボールがレーンに落ちた時、ピンをはじいたりした音だったため、しばらくは投げた感覚とスコアが一致せずに苦労した。五感を研ぎ澄ませて投球練習を繰り返して2カ月、「軸足でボールが落ちる『ドン』という振動を感じ、ピンが飛び勢を目で確認する」という今の方法に行き着いた。

高校時代に東北福祉大少年女子で2位になったことがある実力者。デフ転向後も2023、24年度と連続で日本代表に選ばれた。23年は世界デフ選手権で団体銀メダル、昨年はアジア太平洋ろう者競技大会の女子シングルスで金、ダブルスでは銀メダルに輝いた。遠征費の3割は自己負担で、アルバイトをして一部を賄う。

父の昭仁さん(47)がコーチを務める。フルスコアを達成したこともあるアマチュアボウラーで、独学で得たスポーツ科学の知識などを基に指導してきた。デフリンピック東京大会への出場が決まれば、昭仁さんが常同する初めての国際大会になる。

「試合中は精神的にも支えてくれるので、父と出た大会は優勝しかしたことがない。すごく心強い」と佐藤。目標は個人と団体での金メダル。父と二人三脚で大舞台に挑む。

ボウリング



投球練習する佐藤。後で見る父の昭仁さん(2月27日、仙台市宮城野区のコロナチャットボール仙台店)

メ モ デフボウリングは通常の国際ルールに準拠して行われ、1ゲームの最高スコアは300点。投球開始や終了、試合の中断に関するアナウンスは、モニターに情報を投映するなど視覚的に伝えられる。

22年夏 メダル最多30個 知名度の低さ課題

デフリンピックは、1924年にフランスで「世界ろう者競技大会」という名称で始まり、4年ごとに開催され、今年100周年を迎える。一時はパラリンピックとの統合も検討されたが、双方の大会の意義を尊重するため、聴覚障害のある選手のみでの大会として歩を進めてきた。

今の名称になったのは2001年。「耳が聞こえない」という意味の英語のデフ(deaf)と「オリンピック」を組み合わせた名称が、国際オリンピック委員会に公認された。五輪同様に夏季と冬季があり、東京大会は夏季に当たる。11月15～26日に東京、福島、静岡で21競技を行い、70～80の国と地域の選手約3000人が参加する。

大会では全競技者が補聴器や人工内耳=「人工耳」を外して競技に臨み、何も着けないう状態での聴力レベルが55%以上であることが出場条件の一つ。聴力は、その人が聞こえる最も小さい音の大きさで表されるため、数値が大きいほど難聴の程度は重い。難聴の分類は表の通り。ささやき声が30%、基準値の55%は通常の会話の大きさとしてされる。

日本選手団は22年の夏季ブラジル大会で、佐々木琢磨の陸上男子100m金メダルなど、過去最多の30個のメダルを獲得した。強豪国の仲間入りをしつつある中、国内では大会の知名度の低さが大きな課題だ。

難聴(聴覚障害)の程度分類	分類	平均聴力レベル(デシベル)	聞こえの程度
	軽度	25以上40未満	小さな声や騒音下での会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。会議などでの聞き取り改善目的で、補聴器を使うこともある
	中等度	40以上70未満	普通の大きさの声の会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。補聴器の適応事例とされる
	高度	70以上90未満	非常に大きい声か補聴器を用いないと会話がかたくないか、聞き取りに限界がある
	重度	90以上	補聴器でも聞き取れないことが多い。人工内耳の装着が考慮される

宮城県聴覚障害者協会の菅原伸哉副会長は「五輪やパラリンピックに比べ、デフリンピックは報道が少なく、多くのろう者にとっても映画『みんなのデフリンピック』や写真で知る程度。デフリンピックがどういうものなのか、今度初めて実感することになるだろう」と語り、11月に向けさらなる機運醸成に取り組む。

人工内耳 世界で最も普及している人工臓器の一つで、補聴器での装用効果が不十分な人にとって、現時点で唯一の聴覚獲得法とされる。耳の奥と側頭部に手術で埋め込む受信部分と、音をマイクで拾って耳内に届ける体外部からなる。状態に応じて片耳か両耳に着け、補聴器と併用する場合もある。

※日本聴覚医学会「難聴対策委員会報告」を参照

編集後記 障害知る機会に

生まれつき重度の聴覚障害があるデフボウリングの佐藤杏奈は、主なコミュニケーション手段が手話ではなく口話。違和感なく会話できる分、相手に難聴と気付かれず「無視された」と思わせてしまったり、逆にしゃべれないだろうと先入観を持たれて困惑したりする場面があったという。難聴が起きた時期、聞こえの程度、主なコミュニケーション法、一口に聴覚障害といっても幅は広い。デフリンピックが、競技の魅力に触れながら、聴覚障害について少しでも知る機会にならう。これまで知らなかった一人として、発信の一端を担いたい。